

探訪 北の風景 79

羅臼漁港 根室管内羅臼町

青木和弘

知床の岬に はまなすの咲くころ
思い出して おくれ 俺たちのことを
飲んで騒いで 丘にのぼれば
遙か国後に 白夜は明ける (以下略)

俳優の森繁久彌が1960年に作詞・作曲した「知床旅情」の歌詞である。10年後の1970年、加藤登紀子がこの歌を大ヒットさせ、羅臼に「知床ブーム」をもたらした。大きなリュックを背負ったカニ族や観光客が押し寄せた。翌年の1971年には、羅臼町の観光客の入り込み数が倍増して50万人を超えた。その後、2006年に世界遺産ブームで約76万人に達したが、近年は50万人を少

し越える程度で推移している。2020年は、「知床旅情」が誕生して60年目にあたる。羅臼漁港の「しおかせ公園」に知床旅情歌碑がある。

2005年、ユネスコから世界自然遺産に登録された「知床」とは、知床半島とその周辺海域のこと。山岳地帯をはさんで根室管内羅臼町とオホーツク管内斜里町の2町にまたがっている。氣候が違い、羅臼は夏が涼しく冬の寒さもいくぶんゆるい。流水は来るが海を完全に閉ざすことはあまりない。一方、斜里側は、夏は暑く冬は厳寒で流水が着岸する。

羅臼町は北海道有数の漁業の町である。人口は2057世帯4776人(9月末現在)。就労人口の6割以上が水産関係の仕事に就いている。町内には7つの漁港があり、羅臼昆布、秋鮭、真ほっけ、キンキ、鱈、助宗鱈、エゾバフンウニなど、海は一年中、豊かな恵みをもたらす。

ただ、近年はサケが著しく不良だ。昨年は、サケの定置網にブリやイカがかかったのでサケの不足分を補ったが、今年は、「ブリやイカも捕れていない。揚がるのはシイラだ」と、漁業者の表情はさえない。シイラはスズキ科で自身の淡泊な味が西日本では好まれるようだが、北海道ではあまり人気がない。

9月からサケの定置網漁がはじまったので、9月中旬の朝、セリの行われる羅臼漁港を訪ねた。全天候型埠頭には大型ダンブがずらりと並んで、



知床望郷展望台から眺める羅臼漁港。水平線に見える島影が国後島だ。港からは定置網漁を終え、市場に魚を下ろした漁船が、それぞれの港に帰っていく

セリが終わるのを待っていた。サケは、漁船から羅臼漁協の四角いタンクに移され、7時からのセリにかけられる。セリ落とした業者のステッカーを張ったタンクをフォークリフトで持ち上げて、待機していたダンブの荷台にサケを流し込む。直ちに加工場へ運ぶのだが、ダンブの大きさに比べ、その量はわずかだった。

知床観光では、野生動物を観察するホエール・バードウォッチングの観光船が人気だ。2時間半コースで大人1人8800円。シャチやイルカ、クジラ、冬はオオワシやオジロワシなどに出合える。ヒグマを海から観察する船もある。

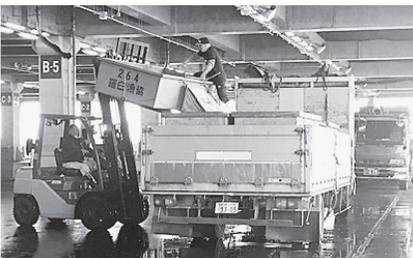
羅臼で見逃せないのが北海道天然記念物の「ひかりごけ」だ。マッカウス洞窟が指定地だが、崩





漁を終え、魚の仕分けをする漁船員。この日、一番多かったのはシイラだと言う。スズキ科の淡泊な白身魚で、西日本では高級魚として人気があるらしいが、北海道では脂ののったサケやホッケの方が好まれる

セリ落とされたサケ。タンクに落札業者のステッカーが張ってある



全天候型埠頭でタンクの荷台にタンクのサケを流し込むが、不漁で量が少ない

落の危険で立ち入れない。でも、羅臼町郷土資料館に育成展示しているので見てほしい。他に、オホーツク文化の国指定重要文化財や生活、自然などのコーナーがあつて見飽きない。羅臼は野趣たっぷりの露天風呂もお薦めだ。「熊の湯」、海岸露天風呂の「セセキ温泉」、「相泊温泉」がある。セセキ温泉の湯量は潮の満ち引きの影響があり、入れないときもあるので注意を。

羅臼は、町の産業がくつきり見える町である。自然に寄り添って生きる人々と恵まれた海の幸がある。生活を支える仕事があり、日々の暮らしを切り盛りする人々の姿が見える。ぶらりと訪れた旅人にも、気取りのない姿で接してくれ、ここには、まるで別の時間が流れているような気がした。ぜひ、また訪ねたいと思う。